

川本真琴

『フェアリーチェーンズ』公式ガイドブック



6/22に発売された川本真琴、衝撃のCD+DVDの新作『フェアリーチューンズ』を
川本真琴本人が完全解説する電子書籍版公式ガイドブック。

ナビするのは、川本さんのデビュー当時から
長年川本さんと苦楽を共にしてきたマネージャー氏と、
編集者の立場でポイント・ポイントで川本さんを取材し、
なんだかんだで11年川本真琴をウォッチしているspoon編集長の斉藤まこと。

『フェアリーチューンズ』DVDを観た人も未見の人も、必読!

今までなにかと誤解されることが多かった川本さんの真の姿を
知ってもらうためにも、絶対拡散希望の無料電子書籍です!

監督との初対面が実家

——去年『音楽の世界へようこそ』が出たあと、ファンケルの『いっぱい食べる君が好き』のCM曲があり、今回のCD+DVDの『フェアリーチューンズ』が出て、川本さんの活動のペースがまた上がってきた感じがしますが。

川本「いや、意識はしてないんですけど、なんかだんだん増えていっちゃったみたいな感じですね」

マネージャー（以下**Mgr**）「みんな川本さんの声を聴く機会が増えて、それで“ああ、『1/2』の川本さんって今何やっているんだろう”ってつぶやくという感じですね」

——タイガーフェイクファ名義でやっていた活動はわりと知られてなかったということなんですか？

Mgr「地下活動だもんねえ」

川本「地下活動って、ひどいじゃないですか（笑）」

——『フェアリーチューンズ』はDVDの方が川本さんの最近のドキュメンタリービデオに結果的になっていて、僕は先日Eテレで放送された神聖かまってちゃんの、の子のドキュメンタリーとまったく同じインパクトを感じました。

川本「あー、かまってちゃんのライブにゲストで呼んでもらったことがあるんですけど、同じなのかもしれないですね。今回のビデオ、言わなきゃいいのについていう感じですよ、きっと。でも、言わなきゃ分かんないじゃないですか。中学校時代とかだったら「想い」は言わずに卒業してしまった、みたいな感じもいいんですけど、大人なんで、やれることはやるぞって（笑）」

——とつぜん、島根県の人と付き合っていたんですよ、という話が次の話の枕として出て来るじゃないですか。この丸腰感はすごいなと。かまってちゃんは、これから世に出るときのフックとして「赤裸々」ってコンセプトでいいと思うんですけど、川本さんが今ここまで赤裸々になる必要ってあるのかと。

川本「いや、あるですよ。どういうふうに分いたらうまく自分の気持ちって相手にまっすぐ伝わるのかな、みたいなことをずっと考えていて。それでオマケだったはずのビデオがどんどんと増えちゃったっていう（笑）」

——『アイラブユー』のPVのときは松江哲明監督と一緒に福井の川本家に行って撮っていたんですよ？



『アイラブユー』の1シーン

川本「そうですね。松江さんとは彼の映画『あんにょん由美香』の音楽をやったときに、私の自宅で歌録りをしたんです。小さいマイクを2本立てて、一応LRみたいにして。エンジニアさんとかは結構ちゃんとした方が来たりしたんですけど。うちのソファに座ってやったんですよね。その総仕切りが松江さんで。そのときが初対面だったんです」

——仕事とは言え初対面がいきなり川本さんの自宅（笑）。

川本「そうそう、いきなりうち（笑）。松江さん私の実家にも来たんですよ。実家まで来ちゃうともうねえ、“あ、バレたわ”って感じで（笑）」

——それはそもそも松江さんの希望だったんですか？

川本「そうなんです。実家は絶対に行きたいって」



福井県にある自宅

——やっぱり彼は追うタイプですからね。ドキュメンタリー魂というか。

川本「でも今回CDジャケットをやらせてもらっている写真家の徐美姫さんも、私の実家に来て（笑）。休憩がてらにお茶を出して「粗茶ですが」とか言って。本当にながっちゃがちゃで汚い家なんですけど、あんなところに写真家の人とかが入ったっていうのが信じられないんです（笑）」

——松江さんの撮影パートでは、島根の村祭りみたいな場所でなぜか川本真琴が地元の「いちご畑」というバンドの一員として歌っている場面が、カオスで最高だったんですが（笑）。

川本「あれは自分で見てもすごいと思いました（笑）。

細かく説明すると当時付き合っていた人が島根の人で、彼に会いに行くのが最初の目的で島根に行ったんです。

でも、いろいろあって彼には会えなくて、たまたま島根の老人ホームで働いている友達もいたので、その友達に会いに行ったら“せっかく来たんだったら演奏しろよな”みたいになったんです。それがなぜか一日中なんです（笑）。

終わったら次、終わったら次っていう営業状態になって。ビデオに出て来る写真の場所は小さな学校なんですけど、なぜか「いちご畑」というグループに入らされて。そうになると私もスイッチが入って、ちょっとひと肌脱ぐか！っていう感じになるじゃないですか。だからレベッカでも歌うか！って。そこでカラオケをやっていたので、「私歌うわ！」って言って。

だから、彼氏を追って島根に行ったら彼氏に会えず、とつぜんイベントに出て、自分の曲もやってと言われたのでやって。そしたら、じつはそれギャラありの仕事で、自分の曲を歌ってなぜか知らないおじさんがお金を儲けていたという（笑）。そういう写真がビデオでは出ています」



島根のアマチュアバンドいちご畑のメンバーとして歌う川本

——確かにあの写真にはただならぬものが出ていますよね（笑）。このDVDにはすべてただならぬものが渦巻いていますよ。

川本「まあ田舎ってそんな感じかもしれないですね」

母校の小学校でのライブ

——あと、すごいなと思ったのが、福井の母校の小学校で『1/2』の弾き語りをやったあと、いきものかがりの『ありがとう』を歌うのはいいですよ。でも、それをビデオに入れると“川本真琴なんか大変そうだな”って見られるじゃないですか。リボンまでしてるし（笑）。あれをあえて自選のDVDに入れちゃう川本さんのオープンマインドがすごいなと思いました。

川本「あれ、なんで入っていたんですかねえ」



母校の小学校でのライブ風景

Mgr「あれは川本さんでしょ！？ 僕は入れなくていいんじゃない？ とは言いましたよ。でもいきものかがりは絶対に入れたって川本さんが言ってたんだよね」

川本「そうそう！ あの部分はイベントの一番MAXの場所だったので。普段なかなか味わえない感じだったんですよ！ 会場中子どもの元気パワーが“わーっ”て」

——子どもたちの目が輝いていましたもんね。逆に先生たちのほうは『1/2』とかを聴いて喜んでたんじゃないですか？

川本「そうですね。そっちは先生たちからのリクエストで」

——そう考えると『1/2』から『ありがとう』へのつながりがすごいなって。ソニーの女性ミュー

ジシヤンの歴史がつながっていますもんね。

川本「ちなみにあの日、西野カナも歌っています。それは小学生からのリクエストで。あと念のため言っておくと、あの日の衣装も小学生に合わせてなんですよ！ 一応TPOを考えて、小学生に合わせているんです！」

——ネットで話題になっていますよね、川本真琴？ 人違いでしたって（笑）。あれは歌のおねえさんの格好だったんですか。

川本「まあ自分の趣味も半分入っていますけど（笑）。でも子どもだしっていのを考えつつのあの格好なんです。私もその書き込み見たんですけど、“だから違うって！”って思っていて（笑）。いろいろ事情があるんだって！って」

——女性ミュージシャンっていうのはデビューしたときにまず型があって、みんなそれをある程度壊さないから“あの人変わらないなあ”っていうのがいいっていう風潮があると思うんです。川本さんの同期のPUFFYもaikoも、そうですね。

川本「あー、でも私もう、イメージ守る会社がないからなあ（笑）」

Mgr「いや、あったときからそうでしたよ（笑）」

川本「途中からおかしくなっちゃったんだよね（笑）」

Mgr「ターニングポイントは作品で言うと『ピカピカ』辺りなんですよ」

川本「その直後『Chappie』への楽曲提供があったじゃないですか」

Mgr「斉藤さん仕切りで『H』の表紙をやらせてもらったやつですね。あそこから変わっちゃった」

——あれで佐内さんとかスタイリストの藍さんとかユニークな人たちと意気投合しちゃったんですね、川本さん。あれ、やらないほうがよかったかなあ（笑）。

川本「確かにあのへんからおかしくなっちゃって（笑）」

Mgr「それでも何回か戻ろうとしたタイミングはあったんですけどね、『微熱』とか。でもそのあとシングルなのに11分くらいある『FRAGILE』があって、あげく会社を辞めたりっていう」

川本「音楽のほうもそっち側から引っぱられたりとかしている部分もあるんですよね」

Mgr「でも佐内さんとかさ、1stアルバムとか好きだよ。なのに、この『tune』のビデオはなんなんだろうっていう（笑）」



『tune』の1シーン

——『tune』は『ありがとう』に続く衝撃でした。PVがYouTubeにも上がっていますが。あれは
どういうふうに撮ったんですか？

川本「あれは佐内さんの事務所の駐車場で、とりあえずなんか「敷物を敷いてそこに住む人をや
って」って言われて。私女優だ！と思って、演じようって。そういうふうに勘違いしていたので
、撮影前の夜眠れなかったりしたんですけど（笑）」

——ただ寝ているだけにしか見えないんですけど（笑）。

川本「でもただ寝ているだけじゃなくって、じっさいはすごく忙しかったんですよ！ 動きの指
導があったりとか」

Mgr「そんな気合いはまったく感じられないですけど。でも途中で気がついたのが、これって猫
を映したビデオですよ。よくYouTubeにもあるじゃないですか、飼い猫を撮っている動画が。
あんな感じで、飼い主が猫を撮っているような」

川本「最初は自分のイメージに合う、幾何学っぽい感じで撮ってくれるような監督さんを探そう
と思っていたんですけど。でもやっぱり佐内さんだと思ったのは、この曲って動物とか植物を

大切にしてくれる人に撮ってもらいたいなって思っていたんですよ。佐内さんって絶対そういう部分で演出的に変なことはしないので」

——それはもう呼吸が合っているからわかるんでしょうね。これはどのくらいの時間で撮ったんですか？

川本「これはお昼から夕方くらいまで。お昼食べに一回出て、そのあと帰ってきてからは“もうみんな好きにやって！”っていう感じで（笑）。それで私が不安になって「これで本当にいいんですか？」って聞いたら、「いいとか悪いとかじゃないんだよ！」って（笑）」

——出た！ 佐内語録（笑）。そのあとに『息抜きしようよ』を撮ったんですか？

川本「そうですね。『tune』の撮影のあとにいろいろ決めて。『息抜きしようよ』は私の中でやりたいことがあったので。歌詞を伝えたかったんですね。自分で歌いたいなと思って。だからリップシンクはやりたいたいというのをお願いして」



『息抜きしようよ』の1シーン

Mgr「でも『息抜きしようよ』のPVってさ、タイトルとはかけ離れたくらい緊張した顔でリップシンクしてるよね。観ていると息抜きできないっていう（笑）」

川本「そうなんです。あれ最初は公共の場で撮っていたので、人の通りもありますし。なんとなくスタッフのみんなも緊張していて。それでも私はすごくいいなと思っていて。そのあとに雑木林に行くって話になって、私は行かなくてもいいかなとか思っていたんですけど。でも雑

木林に向かう車の中でジョン・レノンを聴いていて、それですごくリラックスできて。なんか急に抜けたんですよね、みんなも。それで後半はわりと息抜きしているんですよ。だからその雑木林の部分だけを使えば歌詞の内容に合っていていいんじゃないかって。でも私は最初の緊張した感じも入れたくて。1曲の中に緊張と息抜きが同居しています。やっぱり人と出会うときでも最初は緊張するじゃないですか。そういう硬い感じも入れたいなって」

——じゃあこちらは佐内さん撮影で、総指揮は川本さんなんですか？

川本「そういうわけでもないんですけどね。私は割とまかせるので。でも最終的には話し合いました。編集してやっとイメージが伝わった感じはあります。私も打ち合わせの時点でちゃんと話さないからいけないんですけど」

——今日の話を読んで、だから川本さんの映像作品は独自のものが生まれるんだなっていうのがわかったような気がします。今の川本さんは今回の**DVD100%**の自分を出したい気分なんですね。

川本「ビデオって客観的に見ることができるじゃないですか。例えば普段、一対一でしゃべっていても、しゃべることに夢中だからあんまり自分のことって見えていないですよ。でもあとでビデオを撮っていたら見たいなって思う感じ。そういうふうにビデオで撮っていたら、普段会ってるような人でも“あ、こういうことだったんだ”ってわかるかなと思って」

——それを公開したいっていう意欲はどこからきているんですか？

川本「それはやっぱり個人的な感情ですね（笑）。普段はあんまり自分のことをうまく表現できていないような気がするんですよ。客観的に見ないので。だから見せたいっていう。なんとなく、全部わかってもらえてないような」

Mgr「これを観るとわかってもらえる？」

川本「まあ、こういう人なんだっていうのはわかるかな」

——わかりすぎちゃうんじゃないですか（笑）。ビデオの中でご飯はよそっちゃうわ、島根には行っちゃうわ。

川本「たぶん（自分との関係が）密な人のほうが“あ、そうなんだ”って思うんじゃないかなと。いつもどういうふうに分ったら、こう、うまく自分の気持ちって相手にまっすぐ伝わるのかな、みたいなことを考えていて。こうなっちゃったんですよ」

——なるほど。

Mgr「これ商品じゃないですか。ファンの人たちにもそういう部分を分かってほしいってことなんですか？」

川本「ファンの人たちにも観てもらいたいですね。観なきゃダメですね（笑）」

Mgr「たぶん、ソニー時代の川本真琴が好きな人には、これは誤解を受けるんじゃないのって作品なんですよ」

川本「いや、私は常にこうなんです。昔から変わってないんです！ やっぱそれを言わなきゃならないなって思ったのは最近なんですけど。言わないとわからん なって。前はちょっと遠慮していたんですよ。あんまり言うのも悪いのかなって。でも今は私はこういう人ですって知ってもらって、その上で私の音楽を聴いて欲しいんです」

——あ、その発言でこの**DVD**を出す意味がわかりました。川本さん、いろいろと誤解を受けてたとか言ってましたよね。

Mgr「ああ、岡村靖幸さんと付き合っていたんじゃないかとかね（笑）。どちらも笑って事実無根みたいな話ですよ。どう考えても」

ファンからの質問と宇宙人

——えー、じゃあ最後にファンの人からツイッター経由で僕に届いた川本さんへの質問を訊いていきたいと思います。「最近の買い物でこれは当たりだったという物はありますか」？

川本「うーん、けっこういっぱいある」

——買うの迷わない？

川本「そうですね。最近はアースカラーが好きで。あとギター買ったんですよね。ガットギターで。音が植物な感じで」

——次。「今度カバーしてみたい曲はありますか」？

川本「うーん、何がいいかなあ。急に思ったんだけど、昔、「shampoo」っていうイギリスの2人組の女の子いたんですけど、その『trouble』って曲ですね。あと、この間ソウルのコンピ盤を買ったんですけど、すごいソウルなやつカバーしてみたい。エレキ一人弾きで田舎の祭りでソウルとかもいいですね（笑）」

——「以前TVチャンピオンのゆるキャラ選手権がおもしろいとおっしゃっていましたが、一押しキャラがいたら教えてください」。

川本「あんま知らないですけどね～。あのひよこのやつ、トリピー？トリピーですね」

——鳥取のキャラですね。なんか川本さんと似ているかもしれませんね

川本「似てますかねー（笑）」

——最後に「猫の好きな人から、川本さんが前に飼っていると発言していた「ポン」と「タゴ」のその後について知りたがっています」。

川本「タゴちゃんは、行方不明になってしまったんですよ。帰って来なくなってしまって。ポンちゃんのほうは今も健在で、今はもう一匹と一緒にいます」

——それはどこかの施設からもらってきたっていう？

川本「ポンちゃんとタゴちゃんは勝手に家に遊びに来ていて、いつの間にか居つくパターンで。もう一匹のほうは、施設にいたやつをちょうどネットで見てしまって。見たのは土曜だったんで

すけど、電話したら月曜日に処分されてしまうって聞いて、慌てて引き取りに行きました。マルちゃんっていうんですけど、噛むんですよ。それが残念で。触れやしないっていう（笑）」

——川本さんのおかげで生きているのに（笑）。ファンからの質問はここまでです。ありがとうございました。

川本「話変わるんですけど、宇宙人ってまた見ました？」

——あ、これ説明が必要なので、読んでいる人にまず言いますね。僕が以前テレビ朝日の番組で真夜中の富士山にUFOを見に行くって企画に参加したことがあって、オンエアではよく見えなかったのに現場では次々と見えるんですよ。それはメディアでは超能力者で通っている秋山真人が現場を仕切る番組だったんですが、あれはじつは集団催眠だったのかと、もう15年ぐらい前の話ですが、ふと思って。で、その話川本さんは前回お会いしたときすごく食いついていたということです。

川本「それって一概に催眠術とも呼べないんじゃないかと思うんだよね。私、自分が今まで一度も行ったことのない場所を、前に夢で見ている“ここからここはこうなっていて”ってわかることあるし。前世って信じていないですけど、昔この場所でこの人といたよなあ、みたいなのか、そういう感覚があったりとかして」

Mgr「よく聞くんですよ、初めて行った場所なのに「あ、ここかー！」とか川本さんが隣で急に言って、何だろう？とか思うと、“ここ夢で来たことあるわあ”とか“前に言ったじゃん、あそこだよあそこっ”て。そういえばそんな話をしてたな、ということがたまにあります。しかし川本さんって夢を見てよく覚えているよね」

川本「おんなじ夢ばかり見るから」

——そういえば曲も夢の中で演奏されているのを見て、それを書き起こすって言ってましたね。『アイラブユー』も夢の中でYUKIちゃんが歌っていたという。

川本「そうなんですよね。この間もウチのお母さんの知り合いの方となぜかゴルフに行くっていうことになって（笑）。プレッシャーが大きすぎて、あまりにもプレッシャーで体が硬直しながら寝たときがあって。そうしたら真夜中になんかウィーンって音がしてきて。私たまにあるんですよ、ウィーンって音がするときが。そしたら髪の毛を触ったらビビビビって微々たる電流が流れてきて、急に曲がウワーって頭の中を鳴り始めて、それが四分の三拍子と四分の四拍子が入り乱れた名曲で、これは絶対覚えねばと思ってずっと夢の中で覚えていて、よし覚えた！ 起きるぞ！ と思って起きて、カーって書いて。でも半分くらいしかやっぱ覚えていなくてっていう

」

——なんだそれ。ゴルフの恐怖から生まれた名曲（笑）。

川本「いやー（笑）。でもさ、ウィーンって音がして、夜中急に“ヤバイヤバイヤバイ、この音ヤバイ”って思うときない？」

——絶対音感がある人は、寝ているときも音に敏感ってというのは聞いたことがあります。

川本「こんな大きい音で、近所の人起きないわけがないと思うぐらいの音が聞こえるんです。で、急にフッと消えるんですよ、その音が。うわって思って怖くて見れなくて。本当に連れて行かれたらシャレにならないじゃないですか。でもその音がだんだん近づいてきて。やっぱり宇宙人いるのかなあ、みたいな。プレッシャーとか自分が緊張しているときに来るので、なんか、守護的宇宙人がいて、あんまりギリギリのときは来るのかなって。大きなところを見よ！ みたいな感じで」

Mgr「わざわざ来て曲を流すの（笑）？」

川本「それはわからんけど。すごい曲が流れてきてビックリした」

——曲によって守られていたりして

川本「確かにね、曲が流れてきたら曲のことしか考えなくなるから。でもそのときはホントにゴルフのことしか考えてなかったんで、まさかそこで曲が流れるなんて、はちゃめちゃなことが起こるはずがなくて。で、またその曲が歴史上に残るくらい素晴らしかったんで、バーっと書いたんですけど、全然めちゃくちゃでわからなくて」

——でもモーツァルトとかもそうだったかもしれないね

川本「それは違うと思いますけど」

Mgr「出所がゴルフの恐怖ですからね(笑)」

——いやー、最後はやっぱり宇宙人の話になったか。でもいつも雑誌でカットするところも今回は『フェアリーチェーンズ』の赤裸々路線に倣って掲載しました。次は名曲『ゴルフ』（仮題）完成したらぜひ取材させてください！

川本「それはできるかどうかわからないですけど……またいつか」

Mgr「この電子書籍はコメント欄もあるんですよ」

——そうです。好評だったら、またやりたいと思うので、感想ぜひ書き込んでください。

川本真琴『フェアリーチェーンズ』公式ガイドブック

<http://p.booklog.jp/book/28810>

著者 : spoon.

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/spooninterview/profile>

発行所 : spoon.

ブックログのページ (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28810>

ブックログのページ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28810>